新潮文庫

鳴海仙吉

伊藤整著

新潮社

吉仙海鳴

定價 130 圓

新潮文庫

昭和三十一年十二月二十五日 發行
昭和三十六年九月二十日 四刷

著者 伊藤整

東京都新宿區矢來町七一
發行者 佐藤亮一

東京都新宿區矢來町七一
發行所 株式會社 新潮社
電話東京(341)代表(七一一一)(九五)
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。㊫

印刷・圖書印刷株式會社　製本・憲專堂製本所

© Printed in Japan

新潮文庫

鳴海仙吉

伊藤　整著

目次

讀者に……六
一　鳴海仙吉の朝……七
二　出家遁世の志……三二
三　シェイクスピア談……五八
四　仙吉と學生……九五
五　仙吉街を行く……一二七
六　仙吉とユリ子……一三四
七　知識階級論……一七六
八　不安……一八〇
九　小說の未來……二二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

十　送別會……三三七
十一　藝術の運命……三六六
十二　雪の夜語り……三八五
十三　汚れた聖女……三〇八
十四　幻燈……三三三
十五　地獄……三五四
十六　終幕……三八三
あとがき……四一六

解説　瀬沼茂樹

鳴海仙吉

讀者に

鳴海仙吉とは誰か。作者自身にちがいないとあなたは思うでしょう。

とんでもないことです。鳴海仙吉は君です、あなたです。

一つ氣の利いたことを言つてやろうと思う時、君は鳴海仙吉です。

この急場を何とか切り拔けようと思う時、君は鳴海仙吉です。

心の傷に眼をつぶつて生きのびようと思う時、君は鳴海仙吉です。

鳴海仙吉は自殺もせず、革命もしませんでした。將來もしないでしよう。彼は飴色緣の眼鏡をかけ、鼠色のダブルの洋服を着、革鞄を持つて、智慧あり顏に街を歩いています。君のように、また作者のように。

一　鳴海仙吉の朝

今日は鳴海仙吉の札幌へ出かける日である。彼は朝日の射す、自分の小さな家の縁側の古椅子に腰かけて、大事そうに一本の卷煙草を喫つている。彼は外出用の、三四年前に裏がえしたフラノの服のズボンをつけ、ワイシャツを着てカラアをつけずにいる。彼はその姿のまま、この縁側のすぐ向うにある、この家と鉤の手に並んで建つている母家で朝食を濟まして來たところだ。母は早くから起きて畑へ行つたらしく、見えなかつた。

彼はこの三間の、隱居家に一人で暮している。食事は母家の弟夫婦や母と一緒にしている。仙吉は妻と子供二人を連れて、去年の春東京からここへ疎開して來た。その夏、戰爭が終り、冬を越すと、妻の桃子は、中學二年生の梅太郎と一年生の竹二郎とを連れて、幸いに空襲の火災から免れて殘つた東京の郊外の借家へ戻つて行つた。都會生活に慣れた身體の弱い桃子は、働きものの姑の監督を受けて、ここできりきり働かされるのに閉口していた。それに都會育ちの妻や子供たちは東京への鄕愁に憑かれていた。仙吉は、妻子を東京に送り屆けてからこの家に戻り、週に二日札幌の學校へ講義に行き、外の日は賣文の評論や隨筆を書いて暮している。

彼はさつきから新聞を待つているのだが、それはまだ來ない。そのとき、彼の足もとの縁さきに弟の子供が三人現われた。七つと五つの坊主頭、それに、もつと小さい三つのおかつぱである。

「伯父ちやん、寢坊だなあ」と七つの務が、自分の言つていることが分つているという表情を、陽に燒けた面長な顏に浮べ、仙吉の顏を批評するように眺めながら言つた。

「伯父ちやん、寢坊なんだよ」と五つの丸顏の久が、賑やかな、騷ぎ立てたい氣質から、仙吉の坐つている椅子の脚を動かそうとして握つて見ながら、兄の言葉を繰りかえした。

「うん」と言いながら、仙吉は煙草の灰を、久の丸い大きな頭にかからないように、氣をつけて落した。

「オジチャン、ワワ」と、やつとこの頃戸外を歩けるようになつた三つの惠が、まわらぬ口で兄たちを眞似、目だけは一人前に利口そうに光らした。彼女はやつと首が縁側から出る程であつた。

三人とも伯父さんに相手になつてもらいたいのである。だが、仙吉は昨夜おそくまでかかつて手を入れた十五年も昔の自分の詩のことを考えていたので、この爆發物のような子供たちに應じてやらなかつた。

「伯父ちやん」と力を入れて繰りかえしたのは、二番目の丸顏のはしやぎ屋の久であつた。いつもあんなに仲よくしたじやないか、という非難の調子であつた。

「うん」と答えるだけで、仙吉は子供等の方を見なかつた。食後の煙草を靜かに吸いながら、彼はあれ等の古い詩を直して見たら、そこから今後また自分の詩を作るきつかけを產み出せるものかどうかを思案していたのである。

脊の順に並んだ子供たちは、伯父さんが何か言つてくれるかと、暫く待つていたが、それが無駄だと分ると、つまらなそうに、それぞれモンペ型ズボンの後姿を見せながら裏庭の方へ歩いて

行つた。それにしても昨夜手を入れた詩はどんな風だつたか、考えすぎて調子をこわしていないか、昔のものは昔のまま直さない方がよかつたかしら、と思つて仙吉は腰をあげ、玄關の上りかまちを横切つて三疊の書齋へ入つて行つた。

そこはフロオリングを張つた板敷である。西向きの格子窓の下の、古風な型の坐り机の上に、緣の黄色くなつた古ノオトが擴げてある。その前に敷いてある黑い座蒲團に坐つて、鳴海仙吉はもう一度昨夜手を入れた詩に眼を通した。

林で書いた詩

やつぱりこの事を言わずに行こう。
今のままのあなたを
淋しければ目に浮べていよう。
あなたは白樺の綠の美しい故郷で嫁に行き、
いいお母樣になり、
日々の生活のなかに
夢みたいな私のことは
刺のように心から拔いて棄てるだろう。
私の言葉などは
若さの言わせた間違いに過ぎないときめてしまうだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

いつか、人が皆忘れた頃に私は故郷へ歸り、
閑古鳥のよく聞える
から松の林の端れに家を建てて住もう。
草藪に蔽われて見えなくなるような家を。
私は李の垣根に沿つて村道を歩き、
數々の思い出を拾い集め、
それを古風な更紗のようにつぎ合せて
一つの物語にしよう。
すべてが遲すぎるその時になつたら、
私はきれぎれな色あせた物語を書き、
枝を洩れて月影の射す机の上に置こう。

この詩はあちこちを書き直してあつた。一行目は「この事だけは」となつていたのを、何年とも知れぬ前に「だけ」を消してある。五行目の「いいお母様になり」というのは、全部二本の棒を引いて消してあつたのを、昨夜彼はまた生かして見たのである。それを入れた方が、一人の青年が、その愛情をうち明けるのをためらう愛人の未來の姿として描くのに適當かどうか分らなかつた。この詩にある自己放棄のロマンチックな夢にとつて、この一行は不消化な夾雜物になりそうでもあり、またその女性の姿を完全にするのに役立ちそうでもあつた。仙吉はそう思つて、ま

た生かして見たのだが、自信はなかつた。最後の二行は、

枝を洩れて月影の射す机上に
私はきれぎれな色あせた物語を書き殘そう。

となつていたのを、ふと昨夜このように直して見たのだつた。物語を書いてから、机の上に置く、という方が、もつと靜かな落ちついた印象になりそうであつた。しかし、いま朝の明るい光のなかで讀みかえすと、二十歳の青年の書いた疊みかけるような反復の調子がそこで挫けているような氣もするのであつた。

仙吉は左手で額をおさえて机に肘を突いた。確信を持てなかつた。確信を持てない。だが、二十二三の時におれがこの詩の中で夢想していたこの故郷へ歸つて暮すという生活に、とうとうおれは立ち到つたわけだな、と彼は思うのであつた。仙吉は、それに續いて、茂木ユリ子のことを考えた。仙吉は二十二三歳の頃、友人の茂木篤の妹だつたユリ子のことを考えながら、この詩を書いたのであつた。そして、それから十五年あまり經つて仙吉が空襲下の東京から村へ逃げ戻ると、ユリ子も戰爭で夫を失い、女の子を一人連れた未亡人として村に戻つて來ていた。

むかし彼は茂木篤の家で、ユリ子やその姉のマリ子と遊んだ。歌留多をとつたり、トランプをしたりした。ユリ子は、いつも自分の內側に引つ込んでいるような、ひどく內氣な娘であつた。トランプに負けても勝つても、少し微笑し、蒼白い頰にちよつと赤味がさすだけであつた。人形

をつくつたり裁縫をしたりしていて、家に引つ籠つていた。姉のマリ子は性格が派手で、出好きで、おしやれであつた。マリ子は十八でユリ子は十六であつた。仙吉はマリ子と戀愛遊戯めいた交渉を持つようになつた。マリ子と映畫を見に行つたり、海水浴に行つたり、林檎園のすみで接吻したりした。仙吉はじりじりして、それを本氣にしようとするのだが、マリ子は無邪氣さとコケットリイとの混つた賑やかさで、いつも仙吉をはぐらかしていた。家の中に引つ込んでいる蒼白い無口なユリ子は、彼に無縁な世界の少女のように思われた。

茂木家へ行くと、がらんとした大きな家にユリ子と女中しかいなくつて、ユリ子が出て來ることがあつた。

「兄さんは、今朝早く出かけましたの。」

「どこですか？　學校のテニスコオトかな？」

すると、ユリ子はだまつて下駄をつつかけて、長い土間のつき當りの物置へ行く。どうしたのかと思つていると、だまつて戻つて來て、仙吉の前に立ち止り、ちよつと微笑してから、ゆつくりと低い聲で言うのだつた。

「あのう、ラケットはおいてあります。釣竿が見えないようですから、釣に行つたのでしようか。」

ユリ子は小柄で、丸顔だつた。笑うときも、微笑はゆつくりとその頰に現われ、ゆつくりと消えるのだつた。唇から顎にかけての丸味が、無邪氣な何か幼な兒のような印象を與えた。

それだけの會話で、仙吉は大分長いことユリ子と話をし合つたような氣がするのであつた。マ

リ子と半日海岸の砂の上に裸で寢ころがつたり、水のかけつこをしたりして遊ぶよりも、まだ子供にすぎないユリ子とかわすこういう二言三言の方が、女性の直近に居るような氣のすることがあつた。ユリ子のその眞面目な、軟かな調子に、仙吉は、妙に輕い壓迫を覺えるのであつた。それで

「あ、釣か。じやまた」と帽子に手をかけて引きかえすのだが、ユリ子はなかば後向きになつた彼に向つて、少し首をかしげて、ていねいに膝まで手が屆くような挨拶をするのであつた。その挨拶が終つてユリ子が頭を上げるまで待たずに、いつも仙吉は茂木家を出てしまつたような氣がした。

大學の最後の年の暑中休暇に村へ戻つたとき、マリ子が仙吉を林檎園へ誘つた。二人は夕方出かけた。マリ子は近いうち札幌へお嫁に行くことになつた、と彼にうちあけた。そして仙吉を泣かせ、自分も泣いた。そのとき仙吉は自分がマリ子を本當に愛していたような氣がした。だがマリ子は嫁に行つてしまつた。高等工業を卒業した茂木篤は仙臺の土木建築會社に勤めていたが、マリ子の婚禮のことで來ていた。ある日仙吉は彼に逢いに行き、ユリ子に逢つた。すると仙吉は、この無口な少女にマリ子への自分の感情が移入されたような氣がした。そして眞面目な氣持になつたとき、心がひとりでにユリ子のぼんやりと白い顏に集中しているのであつた。しかし彼はマリ子と親愛をしていたのだし、その前にもマリ子の友達の正子という少女と向見ずな戀愛をしていた。そういうことをユリ子は知つている。それでユリ子を子供だと思いながら、仙吉はいつも氣後れを感じていた。だが、今度上京したらもう村へ戻れないだろうとその頃彼は考えていたの

で、何ごともなくユリ子と別れてしまうのが、淋しかつた。その淋しさから彼はこの詩を書き、書いてしまうと、本當に自分の愛していた少女はユリ子だつたのだと思つて、ひどく感傷的になつた。マリ子との輕はずみな戯愛で、本當に優しいこの少女の愛を失つた人間として自分を考えた。ユリ子そのものより、この淡い悲しみの甘さを彼は忘れることができなかつた。その後何年か東京にいるうちに、仙吉は、ユリ子が結婚して横濱へ行つているということを聞いた。その頃は彼も東京で桃子と結婚していたが、仙吉はマリ子のことよりもよくユリ子のことをどういう男の妻になつたのかなと思い出すのだつた。

いまユリ子はすぐ仙吉の近所の農業會に勤めて、そこの倉庫の端を仕切つて住んでいて、朝夕に顏を合せるのだ。蒼白かつた彼女は、もつと健康そうな、陽にやけた赤らんだ顏になつたため、昔の夢想的な感じはないが、線のはつきりした若々しい容貌を保つていた。その小柄な丸顏の唇から顎にかけて、幼女らしい特徴のある昔の表情が笑うと現われた。彼女は三十過ぎとは思えないほど物ごとに叮嚀で、おどおどして、一人前の主婦になり切つていない若妻のように、戰後のけわしい世間を怖ろしげに見ているのだつた。配給物を取りそこなつたりしては、

「私はまあ、何て馬鹿なんでしよう」と仙吉の母に言い、言つているうちに涙ぐむのだつた。髪をきちんと結つているかと思うと、簡單服の上着の袖が綻びている。時には鼻のわきに煤をつけている。足袋に穴があいている。村の主婦たちは哀れみと輕蔑の目で、以前金持の娘だつたユリ子の生活力の無さを見ているのだつた。畑も作つていないから野菜物に困つて、よく仙吉の母がくれてやつていた。亡くなつたユリ子の夫は、會社員だということであつたが、シナで終戰の半

年程前に戰死したのであつた。ユリ子は藤田というその亡夫の姓を名乘つていた。

自分の詩の對象になるような女などは、今は生きにくい世の中なのだなあ、と鳴海仙吉はユリ子の生活を見ていて思うのであつた。彼は自分の詩の中にいるユリ子は、今のユリ子とは別な人間であつたような氣がするのだ。今ではユリ子は戰死者の妻であり、母親であり、生活に自信のない主婦であり、仙吉や母に厄介をかける隣人であつた。それ等の條件が昔の彼女の姿を蔽い埋めて、この詩の情感をはかない夢のようなものとしか思わせなくなつている。仙吉はユリ子のために、扶助料のことや、保險金のことや、食料のことなどで相談を受け、世話を燒いてやる。だが彼女のことを歌つた詩をこうして長い間しまつていて、夜遲くまで筆を加えたりしていることは口に出さない。

鳴海仙吉は、文藝評論家として、英文學や佛文學の飜譯家としてこの十五年あまり東京で生活して來たが、はじめは詩人になるつもりだつた。仙吉は中學生の頃から詩を作り、詩人以外のものにはなるまいと思つていた。大學の文科に籍があつた頃、彼は學校へはろくに出席せず、若い詩人たちと交際していた。彼は自分の詩を整理して二册のノオトブックに淸書し、一册には「雪の道」他の一册には「李咲く村」という題をつけた。彼はその「雪の道」を二百部ほど自費で印刷して出版した。鄕里から送られて來た授業料で印刷費を拂つたのだつた。その詩集は、その頃出ていた詩の雜誌で二三の賞讚的な批評を受けた。ある先輩の詩人が、仙吉は新しい詩壇の希望であるという手紙を呉れたりした。彼はそれで、もう詩人として一人前になつた氣持で、賴まれるままに四篇か五篇の詩を殘つたノオトの中から寫して雜誌に發表し、大學の授業料は拂わなか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton